

新潟市秋葉区の鉄工所などで日本の伝統的な木造の造船技術を学んだ米国人船大工、ダグラス・ブルックスさん(62)が、米ハーバード大で、川船を造るワークショップ(WS)を開いた。学生たちは、のこぎり、か

んなを手に、見よう見まねで挑戦。約2週間かけて全長7㍎、幅1.2㍎の木製の川船を完成させた。船は3月末まで同大ライシャワー日本研究所で展示されており、4月に川に浮かべる予定という。

新潟の和船文化海外へ

秋葉区と佐渡で技術学んだ米国人



世界屈指の名門大学でのWSは、同大ライシャワー日本研究所が創立50周年に合わせ、学院の計12人が参加した。経験がほとんどない学部と大

米ハーバード大で和船のワークショップを開いて学生を指導したダグラス・ブルックスさん(右)

ハーバード大生に指導 全長7㍎、来月進水予定

WSでは、ブルックスさんが、木を切ったり、精緻な寸法を合わせていったりする作業を見せながら実地で教え、学生たちは熱心に取り組んだ。

ブルックスさんは日本や欧米の伝統的な木造船を研究し製作している。2019年には、新潟市秋葉区の中川造船鉄工所で、木板の接合技術などを学び、1週間ほどで木造船を製作した。かつて佐渡市でたらい舟を造る船大工に弟子入りしたほか、日本の伝統的な木造船の製作技術を本にまとめたこともある。

「学生が日本の道具の使い方を楽しみながら学び、和船文化や、見習いスタイルの教育にも関心を持ってくれた」とブルックスさん。「また新潟を訪れて調査と研究をしたい」と話す。

プラスチック製に押されて、木造船の需要は減少し、県内では船大工はほとんど姿を消したという。中川造船鉄工所でブルックスさんを指導した船大工、中川伸一さん(86)は「時代の流れで仕方ないが、このままでは船大工の技術は失われる。ブルックスさんが継承してくれるのはありがたい」と語った。